

「触るる眼」 楠本 奇蹄

山風の手置きかはり郁子の花  
蝶はその胸の汀へ還りたい  
扉絵に翳 春の樹を生むための  
迷ひ鳥ゐてきさらぎの絵は無題  
空缶の不穩くおんと鐘霞む  
硬貨散るプリズムのはんぶん焼野  
釘沈むごとくに笑ふ永き日を  
春眠は隣の雨を借りにゆく  
頬どこか焦げをりたんぽぼ日和などと  
暗誦にまなぶた深し芹の水  
思惟の手にみづのゆきさき鳥曇  
スプーンの覆ふ片眼の徂春かな  
研げば刃の窮屈なりき薔薇いちりん  
地の蟬にきのふの風の名残かな  
木の虚が麦酒に落ちるとき裸眼  
古傷に土器のつめたさ青水草  
滴と滴つなぎプラムの夜が明ける  
瑠璃鶉とぎれとぎれに森の母語  
ゆらゆらと百合の昏さは摺む手に  
澱を脱いで火蛾は黒い星になつた  
蛇ほそる古きナイフに雨の痕  
血は腿をうらうら尽きぬ大夕焼  
汗もなくアフマドは四歳だつた

ハードリカー西日が地図を搔き筆る  
ドアに手を触れなば糸蜻蛉の湿り  
豎琴の終はりは草の香に瞑る  
ひぐらしの *nerve* をあふれ苦い飴  
大花野こはれた菓子を伴連れに  
ゆふさりのパントマイムを蠅螂と  
ひらかれる膚が野菊に委ねらる  
きりぎりす紙いちまいを灯しつつ  
豺獣を祭る吸殻やはらかし  
虫しぐれどこかに落ちてゐる歯痛  
無花果裂く眉根よ雲を容れやすき  
シリアルの奥歯に昏く冬隣  
はつふゆを汽笛になれぬぬひぐるみ  
ゼラチンの夢みて仔犬時雨かな  
段ボールの指痕が小春の形見  
鼠死して枯葉は晴れた夜を走る  
鷹の弧をあをく躰のさめるまで  
マジシャンの爪編むごとく冬景色  
幻灯は竜頭に鈍く雪もよひ  
公報のうすくらがりに雪虫来  
弔ひの手で綾取りの橋渡る  
雨と鬱ゆつくり拭ひ白鳥は  
誰かを踏むうつつを射抜き冬の川  
凍蝶は灰の遊園地に生まれ  
雪触るる眼のあり誰の孤燭ならむ  
忘却の隙間に鶴の来てひらく  
こゑにあつて玻璃にないもの冴返る